

2007年6月20日

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 在間 進 印

学位申請者 カン・ミンギョン

論文名 ドイツ語の「状態変化動詞」—「使役交替」を軸に—

（本体 238 頁，資料集 53 頁）

結論

カン・ミンギョン氏から提出された博士学位請求論文『ドイツ語の「状態変化動詞」—「使役交替」を軸に—』について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

論文の概要

概念化能力（conceptualizing capacities）は普遍的であるが、それによって形成される概念体系（conceptual systems）およびそれに基づく語彙形成は言語によって異なる。また、言語は、伝達手段として使用されるところにその存在意義があるのであり、したがってその使用実態を幅広くかつ正確に捉えることは、言語分析にとって、きわめて重要な第一義的課題である。このような問題意識のもとで、本論文は、ドイツ語の「状態変化動詞」を取り上げ、「使役交替」、すなわち〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の交替という現象を軸に、電子コーパスを活用しつつ、語彙化の実態を実証的に分析・考察したものである。

本論文は、序論と本論の4章、および結論から構成されている。以下に、各章の概略を述べる。

第1章は、問題提起、方法論を含む本研究の概要である。まず、最近の言語研究の動向を概観した後、言語運用分析が重要であること、本研究がドイツ語動詞の使用実態分析の一環であること、具体的な研究対象として「状態変化動詞」を取り上げること、そして特に、個々の動詞における「使役交替」の可能性およびそれに関与する意味的特性について分析・考察すること、分析・考察に際し、動詞そのものの意味だけでなく、動詞と結合する名詞の意味内容も含めて分析する必要があることを述べる。

そして最後に、各動詞がどのような名詞と結びつきどのような事柄を表すのか、また、その際、〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉のそれぞれがどのような頻度で使用されるかを捉えるための方法論的アプローチとしてコーパス調査を導入することを述べる。

第2章は、関連する先行研究を検討した結果のまとめである。まず、動詞の意味的分類において「状態変化」の概念がどのように捉えられ、「状態変化動詞」が具体的にどのように扱われているかを概観した後、「使役交替」の可能性に関連して、「外的状態変化動詞」と「内的状態変化動詞」の区別に関する議論を検討する。

次に、「使役交替」について、主に派生関係をめぐる議論を整理し、自動詞を基本とする立場（「使役化」「他動詞化」現象として捉える立場）、他動詞を基本とする立場（「反使役化」「脱他動詞化」現象として捉える立場）、派生関係を認めない立場、言語類型論的観点から個別言語の特性として捉える立場などがあることを述べる。

そして最後に、これまでの研究のほとんどが、典型的な使役交替動詞のミニマルペアを用いた、主に動詞中心の分析に留まっているのに対して、本研究では、(i)使役交替しない動詞も含めて「状態変化動詞」を全体的に眺め、使役交替が成立するあるいは制限される意味的要因を明らかにすること、(ii)コーパスによって収集した事例に基づき、事柄（名詞の意味なども含めた文意味）のレベルで、使役交替の可能性を分析すること、(iii)使役交替に関わる「状態変化動詞」の使用実態を捉えることを述べる。

第3章は、本研究で取り扱う「状態変化動詞」の定義および統語的基準に基づく分類である。まず、定義あるいはカテゴリー化というものが持つ問題点について触れた後、プロトタイプ理論の考え方に基づくべきであるとの認識から、辞書の語義記述などを利用し、ドイツ語の「状態変化動詞」として、周辺のなものも含めた計 759 の動詞をリストアップする。

次に、「状態変化動詞」に関連する統語的現象として、自動詞における現在完了の助動詞選択と、他動詞における状態受動の形成可能性について検討し、そして最後に、それらの「状態変化動詞」を、「使役交替」の可能性および構文形式を基準にして、大きく4つのグループ、すなわち

他動詞用法のみの《絶対他動詞》

自動詞用法のみの《絶対自動詞》

他動詞用法と再帰用法で交替を示す《他再動詞》

他動詞用法と自動詞用法で交替を示す《他自動詞》

に分類する。

結果的には、《絶対他動詞》として 424 動詞が、《絶対自動詞》として 147 動詞が、《他再動詞》として 97 動詞が、《他自動詞》として 78 動詞が分類されている。

第4章は、「状態変化動詞」の4つのグループについての、意味特性に関する考察と、「使役交替」の可能性および統語形式の相違に関わる意味的要因の分析である。

まず、《絶対他動詞》の場合であるが、〈非使役的表現〉が制限される主な意味的要因として、次のものを挙げる。

①「手段」的意味要素の含意：

aufdrücken「押し開ける」の drücken「押す」、aufriegeln「かんぬきを外して開ける」の Riegel「かんぬき」など

②「移動物」の含意：zuckern「砂糖を入れて甘くする」の Zucker「砂糖」

③「結果状態」・「結果物」の含意：süßen「甘くする」の süß「甘い」、toasten「トーストにする」の Toast「トースト」など

次に、《絶対自動詞》の場合であるが、〈使役的表現〉が制限される主な要因として、次のものを挙げる。

①人間の関与が想定できない事柄の含意：

altern「年をとる」、aufblühen「花が咲く」、verblühen「花がしぼむ」など。

②出来事の様態の含意：

auffliegen「(ドアなどが)急に開く」の fliegen「飛ぶ」など。

最後に、使役交替動詞の場合であるが、次の3つの使役交替のパターンを抽出する。

①基本的に人間の関与が想定可能な事柄を表すが、その関与の仕方が特定されていないパターン（たとえば brechen「折る／折れる」、öffnen「開ける／開く」）

②人間の関与が想定不可能な自然現象の事柄を表すが、原因格名詞が他動詞の主語として想定できるパターン（たとえば reifen「熟させる／熟す」、röten「赤くする／赤くなる」など）

③人間の行為が明示されているが、その行為が反復的な行為あるいは比喩的な様態の意味を表しうるパターン（たとえば abfahren「すり減らす／すり減る」、zuschlagen「ぱたんと閉める／ぱたんと閉まる」）

なお、《他再動詞》と《他自動詞》の意味的相違について、前者は、「程度的変化」「可逆的变化」「時間的幅を要する変化」を表すものが多く、後者は、「決定的変化」「非可逆的变化」「瞬間的变化」を表すものが多い、ということも述べている。

第5章は、一定の手順で選んだ22動詞の用例をコーパスから収集し、動詞と結合する語句に注目しつつ、使役交替動詞の言語運用上の用いられ方を分析した結果である。

まず、使役交替における〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の対応には、結合名詞の意味内容が密接に関わっている、すなわち結合名詞も含めた場合、使役交替動詞においても、

〈使役的表現〉のみが見られる事例と〈非使役的表現〉のみが見られる事例があることを述べた後、次のような分析結果を挙げる。

- ① 〈使役的表現〉のみが見られる事例と《絶対他動詞》との間に、事柄的意味特性における共通性が確かめられる。
- ② 〈非使役的表現〉のみが見られる事例と《絶対自動詞》との間に、事柄的意味特性における共通性が確かめられる。

次に、結合名詞を含めても使役交替が見られたものに関して、〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の割合を調査した結果、多くは、〈使役的表現〉の割合が高いか、〈非使役的表現〉の割合が高いかのどちらかであったことを述べる。このような調査結果に基づき、言語運用において、〈使役的〉に表現されることが好まれる事柄と、〈非使役的〉に表現されることが好まれる事柄とがあることを述べる。

第6章では、本研究を総括し、今後の展望として次の2つを挙げている。1つは、本研究の分析手法を他の動詞カテゴリー（たとえば移動動詞、行為動詞、出来事動詞など）に応用し、ドイツ語動詞の語彙化および使用実態の体系的記述を目指すことであり、もう1つは、「状態変化動詞」による「語彙的状态変化表現」のみならず、結果構文による「統語的状态変化表現」も調査・分析し、ドイツ語における結果表現の全体像を明らかにすることである。

審査の概要及び評価

カン・ミンギョン氏の論文は、上述のように、ドイツ語の「状態変化動詞」を取り上げ、「使役交替」、すなわち〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の交替という現象を軸に、語彙化および使用の実態を実証的に分析・考察したものである。事例分析、事例解釈などの点でまったく問題がないわけではないが、問題提起は、先行研究の成果を幅広く正確に押さえた上でなされており、採用された分析方法も、十分にそれぞれの持つ問題点が検討されている。また、論の展開、結論は、きわめて明快かつ説得力のあるものになっている。

本論文における結論のうち高く評価できる具体的な点をいくつか挙げると、以下のようになる。

- 使役交替という現象を軸にし、状態変化動詞を幅広く実証的に分析し、〈使役的表現〉および〈非使役的表現〉が制限される意味的要因および使役交替が可能になる意味的要因を明らかにした。
- 使役交替が可能な事柄表現においても、〈使役的表現〉と〈非使役的表現〉の実際の使用頻度には偏りがあることを実証的に示した。
- 動詞と名詞の結合のあり様にも焦点をあて、使役交替に関する動詞語義レベルでの上

記の要因が、動詞と名詞の結合レベルでも、同じように認められることを明らかにした。

もちろん使役交替という現象の分析をより確かなものにするためには、いくつかの問題点が残されているのも事実である。最終試験において、審査委員から様々な質問が出された。それらのうち、いくつかを具体的に挙げるとすると、以下のようなだろう。

- －「状態変化動詞」の分類に理論的な限界があるにしても、関連現象のより精緻な分析が必要である。
- －使役交替か否かの判断は、意味用法上の同一性が問題になるが、使役交替現象なのか多義語現象なのかをより明確にする必要がある。
- －コーパス活用の問題点、コーパス分析による頻度調査の意義付けなどに関して、一層の検討が必要である。
- －使役交替現象におけるドイツ語特有の現象がより明確になるような論述という点から言うとまだまだ工夫の余地がある。

最終試験におけるこのような質問に対しても、カン・ミンギョン氏の応答は、すべてにおいてきわめて的確なものであり、このような問題点をカン・ミンギョン氏が十分に自覚していることを確認することができた。

審査委員会は、最終試験（公開審査）の結果も踏まえ、慎重な審議を行った結果、上記のように、カン・ミンギョン氏の博士学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。